

## 委員 講 評

鈴木 道雄 委員長

「手づくり郷土賞」は、地域の個性、魅力を創出している各種の良質な社会資本を広く発掘し、これを紹介することによって個性的な地域づくりの一助とすることを目的に昭和61年度から実施してきました。平成13年度からは、それに加えて社会資本と関わりを持ちつつ地域の個性、魅力、活力を創出している良質な活動もその対象とし、『地域整備部門』及び『地域活動部門』の2部門により実施しております。

今回の応募物件の全体的な特徴として、「地域住民の参加・利用」、「自然環境の保全・回復」、「歴史・文化・産業など地域資源の活用」が挙げられます。

『地域整備部門』においては、計画、維持管理段階において地域住民が積極的に参加し、地域の自然環境に配慮をしながら、地域の歴史、文化を取り入れ、地域の産業、地域特有の材料を使用し、現代の人でも受入れられるような施設改良を行うといった事例が多く見受けられ、住民と行政が一体となって地域に根ざした社会資本の整備をし、それを活用していこうという意識の高まりが強く感じられました。今後、より多くの活動主体が地域の整備に関わり、愛着を持って社会資本を活用することによりコミュニティの活性化に繋がる地域整備が行われることを期待します。

『地域活動部門』については、近年の自然環境に対する意識の高まりともあいまって、近隣の住民による清掃活動や植栽、或いは環境学習などの取り組み、特に子供が環境への関心を持つきっかけとなるようなイベントと清掃などを組み合わせた取り組みが多く見受けられます。子供に自然環境とふれ合う機会を提供すること、また、環境保全の重要性を教える取り組みは、今後、より重要になっていくものと考えます。また、地域の歴史、文化的なシンボルとなる施設を活用して地域振興を図る活動など、住民が地域の歴史、文化などをしっかりと見据えながら、地域の産業とも連携して特色ある地域づくり、まちづくりを行っている事例も多く見受けられます。住民が主体となり、地域として次世代に引き継ぐものを選択するという流れが様々な地域で具体化することにより、個性的な地域が増えていくことを期待します。

全体を通して、いずれの物件も地域に根ざした、特徴のある施設整備あるいは取り組みがなされており、地域の方々の「自らの地域をいかに良くするか」ということに対する関心の高まりが全国的に広がってきているように感じられます。「手づくり郷土賞」を通じてこの関心の高まりがさらに周辺に波及し、個性的で魅力ある地域がより一層増えてゆくことを期待します。

酒井 孝 委員

地域整備部門については、有珠山西口火口、栃木の蔵、溪流と温泉というような、地域の自然、歴史的構造物等を歴史的・文化的背景を踏まえながら、地域の活性化の新しい拠点として整備して行こうとする、健全な取り組みがみられた。また、道の駅、海浜公園等について良い取り組みが見られた。どんな整備をし、どのように活用され地域に根ざして行くか、そんな切り口から見てみた。4～5点の応募について、プレゼンテーションが十分でなく、良い整備と思われるものの適切な評価を与えることが出来なかったのは残念でした。

地域活動部門については、道路、河川、海岸、公園など歴史的建造物等の社会的資本を地域がどのように位置付け、地域の活動を通してより良く、地域に根ざして行くのかという観点から時間の経過とともに見てみた。活動実績の短いものもあるが、将来の発展性を期待し、選定した。里山、田園風景等の保全、復活等の取り組みが多数見られたが、社会資本との関わりについての活動に着目してみた。地域とのつながり、活動の仕組みが地域の活力を引き立てるような活動に育ってくれることを期待している。

高橋 潤二郎 委員

今年度の「手づくり郷土賞」には地域整備部門において29作品、地域活動部門においては19作品の応募がありました。各参加団体のそれぞれの思いが作品の中に込められており、審査を進めつつ、皆様の日々の課題への注力ぶりに大いに感心させられました。このようなこともあり、提出された全ての作品に対し甲乙つけるのは大変難しいことではありますが、良いアイデアには前向きに評価したいという使命感を持って審査いたしました。

まず、地域整備部門についてですが、各作品とも高齢化社会・環境問題・産業構造の変化など身近な問題についてよく考えられていたと思います。バリアフリー化・間伐材や下水処理水などのリサイクル・旧建築物のコンバージョンといったものが目立ちました。中にはまったく新しい発想・手法で街づくりに挑んで効果を上げている自治体もあり、大変興味深いものでした。

地域活動部門についてですが、各作品とも遊び心の中にしっかりしたテーマが設定されており地域一体となって楽しく取組みながら街をつくる、そしてその経験を通じて学んでいこうという一連の流れが今、生まれつつあると強く感じました。

両部門48作品にかかわられた方々の努力に敬意を表します。

これからも挑戦の心、改革の心を忘れずにより一層のご活躍をされることを期待いたします。

田村 美幸 委員

全体を通しての感想は、「地域住民の計画段階での参加」を実行している物件がおおくなったと思う。資料からは、「市民参加は形式だけ」と思われる参画の事例もないわけではないが、丁寧なワークショップを開催して、ニュースと称した結果報告を毎回発行したところも見られる。それを読んでからできあがったものの図面を見ると、ちゃんと委員会で述べられていた住民の希望が実現されていて感心した。

ところで、毎年審査をしていて気になる点がある。応募物件の総事業費の差だ。今年を例にとってもピンは73億円からキリは740万円までと大きな差がある。勿論審査の際は各物件の評価のポイントを一つ一つ検討してゆき、全体のバランスや独自性を加味してきめてゆく。しなしことが二者選択となった場合、予算をたっぷりかけた物件の社会資本としての価値を、小さなポケットパークなどと同じ舞台上で評価することは出来ない。

そんな時の評価の基準は、その物件がちいき 住民にどれだけ必要とされているか、今後どれだけ利用されるかという点だと思う。私たちは入れ物だけ立派で利用されない物件、いわゆる無駄なものがあるのを知っている。この賞はそういったことを防ぐためにも設けられていると理解している。与えられた審査資料だけではなかなか判断できない場合が多くて、審査する側として

はいつも悩む点である。

そこで生きてくるのが計画段階での住民参加である。自分達の述べた意見が実現したものを誰が愛さないでいられようか。愛着をもって管理、維持にも関わりたいと思うであろう。住民をそういう気持ちにする仕掛けをつくるのが、行政である。

結論として私は、市民と行政の協働がうまくいっている事例に、「てづくり郷土賞」を受賞させたいと願っていつも審査をしている。

藤吉 洋一郎 委員

今年は「地域活動部門」に、審査員泣かせというか選定を悩ませる応募がいくつかあった。放置された里山の自然を守るための運動など、活動そのものは確かに賞賛に値するのだが、はたして国土交通大臣が表彰するのは如何なものかと考えさせられたからである。もっともそうした地域での活動をほかの省庁がどこもこうした表彰制度の対象としていないのなら、国土交通大臣が広い意味での国土作り、地域づくりの代表として表彰するのもいいのかなと思うが議論のあるところかもしれない。

また、「施設整備部門」は、完成したことで直ちに賞の対象になるかもしれないが、「地域活動部門」の場合には、ある程度の継続性が受賞の大切な条件となると思う。この点については、今後は応募要綱でよく分かるように配慮させていきたいと思う。

さらに、「施設整備部門」には今年度もやはり「手づくり」や「郷土」の概念が必ずしも当てはまらないような、巨額な予算を要した事業の応募が目立った。予算額の小さな事業との公平のためというか、比較をし易くするためにも、当該事業のどの部分が「手づくり」なのか、「郷土」なのかをはっきりさせる必要があると思う。そのためには、「地域活動部門」の考え方と重複するかもしれないが、住民参加の成果がどこに反映されているのか、応募段階でよく分かるように求めていくようにさせていきたいと思う。

前田 正孝 委員

審査をしながら、自分たちの住んでいる地域（ふるさと）を元気にしたいという地域の人々の気持ちがひしひしと伝わってきました。

地域整備部門では、計画段階、実施段階、利用の段階などにおいて、地域の人々の参加度合いの大きなものが、結果として元気なふるさとづくりに大きく貢献しているように思えました。地域の一体感の醸成、地域の文化の発信、自然の中での子供達の総合学習、世代間の交流の場の提供など、それぞれが地域にとって重要な役割を果たしています。また自然環境、周辺の景観に配慮しながら、美しい社会資本づくりにも気を配っている様子が見られました。地域活動部門では、地域にある財産を如何に有効活用し、地域の活性化につなげるかという観点からの創意、工夫が沢山見られました。「手づくり郷土」の原点は、まさに、地域の皆さんであるということを実感した次第です。未永く「手づくり郷土」を地域の皆さんが愛しつつけていってほしいと思います。

## 代表事例講評

### 『地域整備部門』

#### 「うすざんにしやまかこうさんさくろ有珠山西山火口散策路」（ほっかいどう北海道 あぶたちょう虻田町）

有珠山を国際的な火山研究活動の場とし、学術・体験的観光等に寄与する機能の集積を目指し、有珠山周辺地域を「自然博物館」と見立て「エコミュージアム」として、散策路を整備している。整備にあたっては多くの企業、市民団体が参加、協力をして、散策路の木道部分には鉄道の枕木を再利用するなど、コスト縮減に努めた整備となっている。散策路付近では最大で80mも隆起した地盤、火山灰に埋まった電柱や西山火口を見ることができ、火山災害等の体験学習の場として新たな観光資源とし、多くの観光客を集めている。そのため、駐車場、施設運営管理、ゴミ清掃等新たな雇用創出にも一役担っている。過去に起きた災害のマイナスの遺産をプラスの産物へと変換させていることは大いに評価できる。

#### 「いくの生野まちづくりこうぼういづつや工房井筒屋」（ひょうごけん兵庫県 いくのちょう生野町）

平成11年に兵庫県より指定を受けた景観形成地区内にある生野町を代表する1832年に建てられた郷宿「井筒屋」を、工房として復元している。復元には、他生野町独自の「生野瓦」の再使用、鉾石を精錬した際にでるカスを固めた「カラミ石」の側溝への利用と、リサイクル、景観配慮の面からも有効な整備を行う他、実施計画段階よりオープンな住民参加の元、ワークショップを繰り返し、より使いやすい施設となる様工夫した。施設内には、まちづくり団体の拠点施設としての利用やコミュニティビジネスの場を持たせ、現在では特売品の開発や製造、販売などを行うといった、地域の歴史、文化を取り入れ、現代の人でも受入れられるような施設改良をしており、地域特有の材料を有効に活用した地域独自の地域振興を図っている。

#### 「ないばがわみず内場川水とみどりゆた緑豊かなけいりゅうさぼうじぎょう溪流砂防事業」（かがわけん香川県 しおのえちょう塩江町）

塩江町は古くから温泉を楽しむ観光客で賑わっており、内場川及び周辺の自然環境を保全し、防災に留意しながら地域内外の人々に親しまれる水辺空間を形成して、町の活性化を図ることを目指し整備をしている。川沿いのキャンプ場の管理棟はかや葺きの建物とし自然に配慮し、また、親水性を高めるため、護岸の勾配を緩やかにした河川プールの整備を行った。護岸改修にあたっては、現地採取石材、天然石を使用し自然景観、生息生物への環境配慮もしている。さらに、整備した管理棟を拠点として、地域の人々により、キャンプ場の管理の他、農産物や工芸品、手打ちそば等の販売を行い集客に努め、地域の活性化に向けて、行政と住民が一体となった取り組みがなされている。このような、地域資源を有効に活用した取り組みが他の地域に波及することを期待する。

『地域活動部門』

「東京<sup>とうきょう</sup>ベイ・クリーンアップ<sup>だいさくせん</sup>大作戦」

「東京<sup>とうきょう</sup>ベイ・クリーンアップ<sup>だいさくせん</sup>大作戦<sup>じつこういんかい</sup>実行委員会 / 東京<sup>とうきょうと</sup>都<sup>みなとく</sup>港区」

「東京湾を泳げる海に」、「子供達にシュノーケリングや水遊びを」を目的に、平成8年から活動を実施しており、年3回の海浜清掃と年1回の海中清掃を行っている。活動主体の実行委員会は多くの行政、企業、団体により形成されており、明確な役割分担をし、安定した組織体制と言える。清掃活動にはチラシによる参加募集を行い、多くの一般住民の協力を得え、ゴミの量は減りつつある。さらに、現在では砂浜の掘り起こしによる酸素供給や、アサリの幼貝の放流による水質浄化など積極的に海をきれいにするといったことも行っている。今年の夏はお台場海浜公園で水遊びが楽しめる様になっており、これも長きに渡る継続的な活動の成果だと評価できる。

「ヤマガタ蔵<sup>くら</sup>プロジェクト “オビハチ”」

(蔵<sup>くら</sup>プロジェクト<sup>じつこういんかい</sup>実行委員会 / 山形<sup>やまがたけん</sup>県<sup>やまがたし</sup>山形市)

山形市の中心市街地内には、城下町時代の商家の名残である「蔵」が点在しているが、時代の変化に伴い壊されてしまうことが多い現状の中、大学の教官・学生を中心に山形市の蔵や、中心市街地の活性化に関心のある行政、市民、企業が集まり、山形市の蔵を新しい視点で捉え直すことによって街を再生させる試みを行っている。関係者による企画運営会議を開催、土地と建物を無償で貸し出してもらい、独自で蔵の内外の改装を行い、カフェギャラリー、ワークショップ、ライブ、上映会、シンポジウム等を開催。蔵の新しい利用方法、並びに「山形らしさ」を示す蔵の存在意義が改めて提示されました。開催期間中（5月10日～6月1日）の来訪者、マスコミへも多く取り上げられ注目を集めている。今後はアンケート結果を踏まえさらなる検討をする予定で、さらなる活動が期待される。